

乳幼児を持つ母親の認知的特徴とディストレスの関係 ー パーソナル・ネットワークの相対的評価からの検討 ー

石 曉玲

東京福祉大学(池袋キャンパス)

〒171-0022 東京都豊島区南池袋2-47-8

(2019年11月30日受付、2020年2月13日受理)

抄録：本研究の目的は、従来の研究で取り上げられてきた認知されたサポートおよび文化的自己観に、母親のパーソナル・ネットワークにおける関係性の相対的評価(関係性高揚で測定)を加え、母親のディストレス(育児不安と精神的健康度で測定)を予測し検討することである。2～6歳児を持つ母親272名を対象とした質問紙調査の重回帰分析の結果から、ディストレスに寄与する要因として、文化的自己観(相互協調性・相互独立性)、親族からのサポートのほかに、新たに「夫への消極性高揚」が見出された。また相関分析から、「関係性高揚」の一部において、相互協調性および相互独立性との間に関連があることも確認された。母親の認知的特徴のうち、「自分の夫はほかと比べると悪くない」という評価がディストレスにつながることを踏まえ、そのプロセスを解明し支援につなげることが今後の課題となる。

(別刷請求先：石 曉玲)

キーワード：母親のディストレス、文化的自己観、関係性の相対的評価

問題と目的

生涯に渡って経験するストレスは子育て期が一番高く(稲田, 1999)、母親が感じている育児の不安やストレスが子どもの愛着形成を阻害し、情緒的・行動的問題の発達にも影響を与えることが知られている(Baker, Blacher, Crinic & Edelbrock, 2002; Ong, Boo & Chandran, 2001; Shutay, 2001)。特に乳幼児にとって家庭から受ける影響が大きいことを踏まえると、母親の持つストレスを軽減する方略を見出すために、ストレスの規定要因を明らかにすることが重要である。

筆者はこれまでに、育児不安および精神的健康(GHQ)を、個人の経験する不快な主観的状态を指す包括的な概念であるディストレスと捉え、その規定要因を体系的に検討した(石, 2013)。それにより、父親が持つジェンダー観、母親が認知するパーソナル・ネットワークからのサポート、および文化的自己観(相互協調性・相互独立性)が母親のディストレスと関連していることが明らかになり、そのうち特に相互協調性が、育児不安や精神的健康度に直接寄与し、これまで強調されてきた家庭内外からのサポートを凌いだ。なぜそうなるのかについてはまだ十分にわかっていないが、相互協調性は評価懸念という下位尺度を内包するため、相互協調性の高い人は、人間関係に自己の価値を置き、「人の目線を気にし、相手に合わせる」

ことで心的エネルギーを消耗し、否定的な評価に対して傷付きやすいと考えられる(石・桂田, 2010)。

日本の母親が育児問題に陥るのは、自分の生き方を規定するものとして社会的評価に重心を置く傾向があるため、自分自身の内的調和のみならず子どもとの調和も持てなくなるからだと指摘がある(今井, 1990)。自己を捉える際には、自己を他者と区別し、独立な存在だと捉えている「相互独立的自己観」が顕著な西洋文化においては、自己を現実以上に偏って肯定するという自己高揚が普遍的に見られるのに対して、日本では自己卑下傾向があると報告されている(高田, 1987など)。また日本文化内の変動があり、相互独立性が高いほど自己卑下傾向が弱いとの報告もある(高田, 2002)。高田(2002)のレビューにおいては、相互協調性が高い者は、日常生活で社会的比較を用いやすく、自己認識が否定的になるとまとめている。このように他者との関係性を重んじる「相互協調的自己観」が顕著な日本社会では、子育てについても「他者と比べて自分は相対的にどうか」という社会的比較による自己評価を行われがちなのが子育ての困難さを増幅している可能性がある。

その一方で、遠藤(1997)は自己に対してではなく、自分が持っている人間関係の関係性を偏って評価する傾向を「関係性高揚」と捉え、その「関係性高揚」は精神的健康を促す効果があると報告した。それによれば、関係性高揚には、ポジティブな側面について「自分たちの関係性は、他の

人のそれより良い」と偏って評価するという「積極的關係性高揚」と、ネガティブな側面について「自分たちの關係性は、他の人のそれより悪くない」と偏って評価するという「消極的關係性高揚」がある。日本の大学生の親友関係および既婚者の夫婦関係においては、「積極的關係性高揚」と「消極的關係性高揚」がそれぞれ確認されていた。そして、夫婦関係における關係性高揚が自尊感情以上に相対的幸福感に寄与していることが示唆された。

その後の黒田・有年・桜井(2004)の研究では、大学生の親友関係における關係性高揚と複数の精神的健康指標との關係を検討した。その結果、關係性高揚は相対的幸福感・自尊感情・充実感と正の關係を示し、抑うつと負の關係を示した。この関連性は、相互独立性が低い群、また相互協調性が高い群において顕著であった。また田上・柴山(2011)も大学生の親友関係における積極的關係性高揚と友人関係満足度との関連を報告した。

これらの研究は日本人のディストレスと自己を検討する上で、關係性高揚という視点を提供できたが、対象者はほとんど大学生の友人関係に限られ、数も少なかったため、従来の研究で示された要因に比べ、育児期の親にとっての關係性高揚はディストレスの軽減にどのくらいの効力があるのかについての位置づけがまだ不明である。そこで、本研究では乳幼児を持つ母親のパーソナル・ネットワークの機能が重要であることを踏まえ、母親のパーソナル・ネットワークの三つの側面(夫、夫以外の親族、親族以外の人)への關係性高揚を測定し、これらの変数と、従来の研究で取り上げられてきた認知されたサポートおよび文化的自己観より、母親のディストレスに關する要因を総合的に検討することとした。さらに、相互協調性の高さと否定的な自己認識との関連を考慮すると、相互協調性が高い人は關係性高揚についても低く評価する可能性があり、その点も検討する。具体的には、①子育て中の母親の全般的な対人関係(夫、夫以外の親族、親族以外の人間関係)における關係性高揚を確認した上で、②文化的自己観、認知されたソーシャル・サポートおよび關係性高揚の相互關係を検討し、③これら三つの認知的特徴の指標と母親のディストレスとの関連性を検討する。

方法

1. 調査対象者・手続き

関西地区の保育園7園の協力の下、無記名式による質問紙調査を行った。調査の目的や個人情報の保護、集団データの統計処理による公表にしか用いられないことを明記した。園児家庭への配布と回収は保育士を通じて行い、調査の回答

は自由意志によるものと了承した上で、同意を得られる方だけ記入し提出してもらうようにした。合計283名から回答を得た(回収率が60.2%)。そのうち、欠損や不備のあった11名を分析から除外し、保育園児(2~6歳)を持つ母親272名のデータを分析対象とした。なお、石・桂田(2010)と同じデータセットからのサブデータを使用している。統計分析にはIBM SPSS Statistics 22を用いた。対象者の属性については、次の通りである。母親の平均年齢は34.39歳($SD=4.25$)であった。就業形態はフル・タイムが45.0%、パート・タイムが46.1%、その他(休職・学生など)が8.9%であった。一週間の平均労働時間は、フル・タイムが42.86($SD=10.37$)時間、パート・タイムが29.18($SD=9.55$)時間であった。学歴に関しては、中卒が6.3%、高卒が33.8%、専門学校卒が26.4%、短大卒が20.8%、大卒が12.6%であった。子どもの平均年齢は4.13歳($SD=1.01$)であった。そのうち、男児は50.7%で、女児は49.3%を占めている。

2. 調査内容

關係性高揚尺度

乳幼児を持つ親の状況に合うように、遠藤(1997)の尺度に若干の変更を加え使用した。本研究では夫婦関係を含めて問うため、「積極的關係性高揚尺度」については、必要と感じるよりも暖かいと捉えているかどうか、精神健康上より重要な事項だと考え、「必要な」という項目を削除した代わりに「暖かい存在である」を追加し、計7項目となっている。また「消極的關係性高揚尺度」については、「葛藤的である」と「寂しい」と感じるかどうかは、特に日常的に接し回避しにくい夫婦関係においては重要な項目との理由から、従来の5項目にこの2項目を追加し、計7項目となっている。また重要な対人関係において他者のそれと比べる相対的評価への認知とサポートを受け取る可能性への認知が有する機能の違いを比較することが目的に含められていることから、教示は「対人関係(夫、夫以外の親族、親族以外の人間関係)のそれぞれの領域でサポートをしてくれる人との關係を、周りの同年代・同性の人々のそれと比べてどう当てはまるか」に変更した。当てはまる程度を1点から5点までの5段階評価で測定している。なお、消極的關係性高揚尺度の7項目を逆転項目として扱い得点を算出しており、その得点はネガティブな評価に当てはまらない程度を示している。

他の心理的尺度

上記の關係性高揚尺度のほかに、ディストレスを精神的健康度および育児不安で測定した。前者の精神的健康度は、中川・大坊(1985)が訳した日本語版General Health Questionnaire (GHQ) 28を用いた。この28項目版は身体症状、

不安と不眠、社会的活動障害、うつ傾向の4つの下位尺度(各7項目)から成っている。本研究ではLikert法(4件法、0~3点)を採用し、得点が高いほど精神的問題を有する可能性が高いことを表している。後者の育児不安は田中(1997)が作成し、信頼性、妥当性が確認された10項目尺度を用いた。「子どものことで、イライラすることがある」などの項目で構成され、得点が高いほど、育児不安が高いことを表している。

また、文化的自己観とソーシャル・サポートも測定した。文化的自己観は、高田(2000)の相互独立的一相互協調的自己観尺度の短縮版を用いた。相互協調性には「評価懸念」と「他者への親和・順応」の2つの下位尺度から構成されており、相互独立性は「独断性」と「個の認識・主張」の2つの下位尺度から構成される。ソーシャル・サポートは石・桂田(2010)で自作し使用した尺度で、知覚されたソーシャル・サポートについて、「子どもが病気のときに病院の同行や家事などを手伝ってくれる」など、20項目を5件法で調べた。3つのサポート源(夫、親族、親族以外の人)各々の全般において、同じ項目について評価してもらい、それぞれの合計点はそれぞれのサポート源によるサポートを表わしている。さらに子ども・母親の年齢、母親の学歴を問うフェースシートを含めた。

結果

1. パーソナル・ネットワークの相対的評価

遠藤(1997)に準じ、パーソナル・ネットワークの相対的評価の様相を検討した。夫婦関係、親族関係、親族以外の対人関係のそれぞれにおいて、関係性高揚尺度の項目ごとの平均値と中央値(=3)との差をt検定で検討したところ、すべての項目で平均値のほうが高く、0.1%水準で有意であった。対人関係の3次元のそれぞれにおいて積極的關係性高揚と消極的關係性高揚が見られた。

また、対人関係の次元間における関係性高揚の差異をみるために、一元配置分散分析を行った。積極的關係性高揚に関しては、対人関係次元で有意な差が認められ、多重比較により、「夫」および「親族」に対する積極的關係性高揚が、ともに「親族以外の人間関係」のそれより高く評価されていることが示された。消極的關係性高揚に関しては、「夫」より、「親族」および「親族以外の人間関係」に対する評価が高いことが示された(表1を参照)。

同様の分析より、母親が認知されたサポートは、対人次元間において有意な差がみられ、「親族以外の人」と比べ、「夫」および「夫以外の親族」からのサポートをより多く受けていると感じていることが明らかになった(表1を参照)。

表1. 關係性高揚およびサポートの対人關係間の比較

	平均値	SD	F値
積極的關係性高揚			
夫	28.21a	7.75	4.58**
親族	28.29a	5.30	
親族以外の対人關係	26.45b	4.81	
消極的關係性高揚			
夫	19.73c	3.95	17.87***
親族	21.17d	3.01	
親族以外の対人關係	21.90d	2.25	
ソーシャル・サポート			
夫から	73.15e	16.92	112.58***
親族から	69.13e	20.57	
親族以外の人から	43.64f	23.65	

注: a-b, c-d, e-fの間に多重比較により有意差があった。

*: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$

これらの結果より、認知されたサポートの対人次元における評価の方向性は、積極的關係性高揚のそれと一致し、反対に消極的關係性高揚のそれとは異なることが示された。

2. 文化的自己観・關係性高揚およびソーシャル・サポートの間の相関分析

ディストレスに関連すると予測される3つの認知的要因(文化的自己観・關係性高揚およびソーシャル・サポート)を示す各尺度の α 係数を確認し、尺度間の相関分析を行い、有意性が認められたもののみ表2に示した。その結果、文化的自己観の下位尺度間において負の相関がみられた。文化的自己観と各対人次元のサポートとの間にはいずれも有意な相関はみられなかった。サポートと關係性高揚との間では、夫から多くサポートを得ていると認知するほど夫に対する關係性高揚(積極的および消極的)も高くなり、その対応關係は親族關係においても同じ傾向がある。親族以外の対人關係によるサポートは、積極的關係性高揚のみと関連が示され、消極的關係性高揚とは有意な相関はみられなかった。また、文化的自己観と關係性高揚の各指標との相関をみたところ、わずかではあるが、相互協調性と親族以外の対人關係における積極的關係性高揚および夫に対する消極的關係性高揚との間で負の有意な相関が示されたのに対し、相互独立性と親族以外の対人關係における積極的關係性高揚および夫に対する消極的關係性高揚との間では正の有意な相関がみられた。

表2. 認知的特徴の指標間の相関係数

	α 係数	相互協調性	相互独立性	夫からのサポート	親族からのサポート	親族以外からのサポート
相互協調性	.74		-.39***			
相互独立性	.72					
夫からのサポート	.95					
親族からのサポート	.92			.32***		
親族以外からのサポート	.90				.18*	
夫積極高揚	.80			.68***	.18*	
親族積極高揚	.91			.28***	.65***	
親族以外積極高揚	.89	-.18*	.21**	.23**	.33***	.52***
夫消極高揚	.82	-.29**	.19*	.66***	.21**	
親族消極高揚	.74			.23**	.49***	
親族以外消極高揚	.64			.27**	.25**	

注：*: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$

3. ディストレスに關与する要因

母親のディストレスに關与する要因の分析に先立て、まずディストレス(育児不安・精神的健康度とその下位尺度)と認知的特徴を表わす3要因のピアソンの積率相関係数を算出し、有意性が認められたもののみ表3に示した。母親の文化的自己観の一側面である「相互協調性」は、「身体的症状」を除き、ディストレスを表わす各尺度との間に正の有意な相関がみられ、文化的自己観のもう一側面である「相互独立性」は、ディストレスを表すすべての尺度との間に、負の有意な相関がみられた(表3を参照)。

サポートとディストレスの指標との間に、「親族以外の人間関係によるサポート」はディストレスとの有意な関連が見られず、「夫」および「親族」からのサポートは、わずかではあるが負の有意な相関が認められた。

また、積極的關係性高揚のうち、夫に対する積極的關係性高揚は、「身体的症状」を除き、ディストレスを表す各尺度との間に負の有意な相関がみられ、親族および親族以外の人間関係に対する積極的關係性高揚では「育児不安」と「うつ傾向」のみに負の有意な相関がみられた。消極的關係性高揚のうち、夫および親族以外の人間関係に対する消極的關係性高揚はおおむね全般的なディストレスとの間に負の有意な相関がみられた。親族に対する消極的關係性高揚は「不安と不眠」および「うつ傾向」のみと負の有意な相関がみられた。この結果から、人間関係次元におけるそれぞれの關係性高揚とディストレスとの関連は異なることが示され、概していえば、夫に対する關係性高揚はディストレスとの関連がより強く、また積極的關係性高揚よりも消極的關係性高揚のほうが、より関連が強いことが見受けられる。

表3. 母親の認知的特徴とディストレスとの相関係数

	育児不安	精神的健康度得点	身体的症状	不安と不眠	社会的活動障害	うつ傾向
相互協調性	.43***	.32***		.35***	.26***	.32***
相互独立性	-.34***	-.33***	-.18*	-.33***	-.31***	-.28***
夫からのサポート	-.21**	-.16*		-.21**		-.17*
親族からのサポート	-.23**	-.16*				-.28***
親族以外からのサポート						
夫積極高揚	-.16*	-.19*		-.17*	-.25***	-.20**
親族積極高揚	-.20**					-.23**
親族以外積極高揚	-.19*					-.18*
夫消極高揚	-.24**	-.36***	-.17*	-.39***	-.32***	-.31***
親族消極高揚				-.22**		-.16*
親族以外消極高揚	-.25**	-.30***	-.22**	-.32***		-.25**
育児不安	1	.42***	.19**	.40***	.30***	.47***

注：*: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$

表4. ディストレスの各指標を目的変数とした重回帰分析の結果

目的変数	説明変数	β 値	R	R^2	F 値
育児不安	相互協調性	.34***	.51	.26	14.90***
	親族からのサポート	-.21**			
	相互独立性	-.20*			
精神的健康度得点	相互独立性	-.30***	.46	.21	17.27***
	夫消極高揚	-.30***			
身体的症状	親族以外関係消極高揚	-.20*	.22	.05	6.68*
	夫消極高揚	-.30***			
不安と不眠	相互独立性	-.21*	.50	.25	14.08***
	相互協調性	.18*			
	夫消極高揚	-.30***			
社会的活動	相互独立性	-.26**	.43	.19	14.46***
	相互協調性	.19*			
うつ傾向	親族からのサポート	-.23**	.48	.23	9.16***
	夫消極高揚	-.17*			
	相互独立性	-.17*			
	相互協調性	.19*			

注: *: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$

育児不安と精神的健康度およびその下位尺度との相関を見ると、すべて正の有意な相関が見られ、特に「うつ傾向」との間に比較的強い関連があることが示された。

次に、文化的自己観・関係性高揚および認知されたサポートを説明変数、ディストレスの各指標(育児不安・精神的健康度とその下位尺度)を目的変数として、ステップワイズの変数増加法により説明変数を決定し、それらを投入して重回帰分析を行った。結果を表4に示した。育児不安の変動にもっとも寄与しているのは相互協調性であり、その次は親族からのサポートと相互独立性であった。精神的健康度(GHQ)の変動に寄与しているのは相互独立性と夫に対する消極的關係性高揚であった。身体的症状の変動に寄与しているのは親族以外の対人関係に対する消極的關係性高揚だけで、不安と不眠に寄与しているのは夫に対する消極的關係性高揚と文化的自己観の2側面であった。社会的活動に寄与しているのは、夫に対する消極的關係性高揚と相互独立性であることが示された。うつ傾向には、育児不安に寄与している3つの要因のほかに、夫に対する消極的關係性高揚も関係していることが明らかになった。

考察

本研究は、これまでに青年期を中心に検討した自己の捉え方と適応の関係について、関係性への認知的特徴の各側面(文化的自己観、関係性高揚、認知されたサポート)のディストレスへの影響力を、育児期の母親がもつパーソナ

ル・ネットワークの各対人次元(夫、親族、親族以外の人間関係)まで踏み込んで検討した。

その結果、育児期の母親の相対的評価からは、各対人次元(夫、親族、親族以外の人間関係)における積極的關係性高揚と消極的關係性高揚が確認された。これは、黒田・有年・桜井(2004)と田上・柴山(2011)の大学生を対象とした研究結果の方向性を支持するものであった。本研究の結果は、外山(2002)も論じているように、自分を含めた親密な関係性の評価を高揚させることによって、間接的に自己評価を高めている、という補償的心理プロセスが、相互協調性が優位な日本人においては存在していることの裏付けとなる。

文化的自己観、関係性高揚、認知されたサポートの3要因からディストレスを予測するステップワイズ法による重回帰分析を行った結果、育児不安に寄与する要因として、順次に相互協調性、親族からのサポートと相互独立性が選出された(表4を参照)。この結果は先行研究(石・桂田, 2010)の結果の方向性と一致し、関係性高揚を投入しても上記の要因が寄与していることが安定していた。このことから、子どもや育児で生じる育児不安においては、パーソナル・ネットワークの相対的評価つまりサポートしてくれる人たちの関係性といった、他者と比べる部分よりも、自分がどう見られるかという自己懸念、すなわち特性不安との関係が強いと考えられる。

精神的健康度(GHQ)に寄与しているのは、相互独立性と夫への消極的關係性高揚であった。相互独立性が精神的健康およびその下位尺度(身体的症状を除き)にも寄与して

いることについては、相互独立性の高い母親が自信を持って行動しやすく、アサーティブな自己表現ができる場合は対人ストレスが低いこと（例えば関口・三浦・岡安, 2011）と関連して考えると、理解できる。また、夫との関係におけるネガティブな評価が他の人のそれより悪くないという消極的關係性高揚が多く、精神症状に寄与しているのは、日本において夫への消極的關係性高揚が精神的健康を支える重要な要因であると言えよう。乳幼児を持つ母親へのインタビュー調査（石, 2015）においても、「（子どもの発達）ほかの子どもと比べられて辛い」、「自分の子育てを否定されるのではないかと気がかりだ」と触れる一方で、夫について語る場合は「自分の夫や子育てがおかれている状況はほかの人に比べたらまだ悪くない」としばしば言及されている。ほかの家族と比べると、自分の夫は悪くないと評価できることが、不安やうつ傾向を軽減させ、社会的活動ができる砦であることが本研究の結果から読み取れる。言い換えれば、夫を最低限受け入れられる存在だと評価できるかどうかはその母親のメンタル・ヘルス維持において重要なポイントとなっている。

身体的症状に寄与する要因は、親族以外の対人関係（職場関係・友人関係）における消極的關係性高揚だけだった。その結果から、身体的側面と精神的側面に、影響をもたらす対人関係の次元が違う可能性があるとして推測される。それに関連して、親族以外の対人関係における消極的關係性高揚が親族以外の対人関係からのサポートとの間に有意な相関が見られなかった点もほかの対人関係の様相と異なる。本研究の対象者である乳幼児をもつ働く母親にとっては、子どもが病気の際に休暇がとれる職場であるか、また万が一子どもの世話を親族に頼めない時に友人などに頼めるかが切実なことであると考えれば、親族以外の対人関係における積極的關係性高揚とサポートとの間に中程度の正の相関があることを理解できる。しかし、この対人次元のサポートはほかと比べると少なく、「悪くない」との評価に動機づけられる要因をさらに検討する必要がある。自分の友人関係・職場人間関係には問題を抱えていないという認識が、疲れや頭痛などの身体症状に寄与するという本研究の結果から、母親にとっては多層な人間関係のつながりが必要であり、働く母親が安心できるように職場支援などが欠かせないと考えられる。

これに関連して、結婚についての統計調査によれば（厚生労働省, 2013, p70）、結婚しないことのメリットの一つは「広い友人関係を保ちやすい」と26%の女性が認識しているほど、友人関係を大事にしようとする傾向が見えてくる。また高橋（2019, p95）が行った幼児の対人関係についてのレビューでは、24%の幼児が一番大事な人に友達を

選んだ。これらのことから、友人関係の重要視は日本文化において一般的によくみられる事象であり、他の人と比べて問題がない、悪くないと感じることが身体的症状を防ぐという可能性が示された今回の結果より、今後は文化と健康の視点から深く検討する必要がある。

さらに、「夫の消極的高揚」および「親族以外の人の積極的高揚」において、「相互協調性」との間に弱い負の相関がみられ、「相互独立性」との間に弱い正の相関がみられた。「相互協調性が高い人は關係性高揚についても低く評価する」との予測が一部において確認できた。上述してきたように、「夫の消極的高揚」はディストレスの低さの維持に重要な要因であり、「相互協調性」が高い母親は夫への最低限の評価さえ持ちにくいことを考えれば、育児においても個人の精神衛生においても、苦しい状況に陥りやすいと考えられる。相互協調性が顕著に高い母親には、認知的修正による介入の必要性があるかもしれない。

本研究は、これまでによく検討されてきたパーソナル・ネットワークのサポート機能よりも、文化的自己観がディストレスとの関連が強いことに続き、「夫がほかより悪くない」という相対的評価が、母親のディストレスの軽減に重要であることが新たに示唆された。しかし自己評価に腐心し、夫への最低限の評価をもちにくい母親に対してどのように支援しその認知を変えられるのかが今後の課題となる。夫との葛藤に関して、夫婦のコミュニケーション方略、アタッチメントのパートナーが関わっていることから（Rholes & Simpson, 2004 / 遠藤・谷口・金政・串崎, 2008; 周・深田, 2017）、これらの様相または実際の夫婦間葛藤状況とほかの人と比べた際の認識とのズレがあるのかどうかを解明するために、第一のステップとして母親自身の語りからヒントが得ることが大事だと思われる。

結論

本研究では、乳幼児を持つ母親を対象に、母親の認知的特徴である文化的自己観・關係性高揚・認知されたサポートという3つの要因から、ディストレスの二つの側面である育児不安と精神的健康度を予測する重回帰分析を行い検討した。その結果、文化的自己観（相互協調性・相互独立性）、親族からのサポートのほかに、夫への消極性高揚がディストレスに関与する重要な要因として見出された。しかし關係性高揚の測定方法は自己報告による相対的評価にとどまっていることに留意すべきであろう。「夫がほかよりは悪くない」という相対的評価が、母親のディストレスの軽減に重要であることを踏まえ、そのプロセスの解明が今後の課題となる。

引用文献

- Baker, B.L., Blacher, J., Crinic, K. and Edelbrock, C. (2002): Behavior problems and parenting stress in families of three-year-old children with and without developmental delays. *American Journal on Mental Retardation* **107**(6), 433-444.
- 遠藤由美(1997): 親密な関係性における高揚と相対的卑下. *心理学研究* **68**(5), 387-395.
- 厚生労働省(2013): 平成25年版厚生労働白書 一若者の意識を探る一. 東京, p70.
- 黒田祐二・有年恵一・桜井茂男(2004): 大学生の親友関係における関係性高揚と精神的健康との関係 一相互協調的 一相互独立的自己観を踏まえた検討一. *教育心理学研究* **52**, 24-32.
- 今井皖式(1990): 母親援助と“ほどよい母親”: 魂を眠らせる人たち. *日本保育学会大会研究論文集* **43**, 626-627.
- 稲葉昭英(1999): ストレス経験の生涯発達の变化と性差: 平成七(1995)年度国民生活基礎調査を用いて(特集性別分業とジェンダーの計量分析). *理論と方法* **14**, 51-64.
- 中川泰彬・大坊郁夫(1985): 日本版GHQ精神健康度調査票手引. 日本文化科学社, 東京.
- Ong, L.C., Boo, N.Y. and Chandran, V. (2001): Predictors of neurodevelopmental outcome of Malaysian very low birthweight children at 4 years of age. *Journal of Paediatrics & Child Health* **37**(4), 363-368.
- 石 曉玲(2013): 幼児の母親が持つディストレス 一日本と中国の共通性と差異一. 風間書房, 東京.
- 石 曉玲・桂田恵美子(2010): 保育園児を持つ母親のディストレス: 相互協調性・相互独立性およびソーシャル・サポートとの関連. *発達心理学研究* **21**(2), 138-146.
- 石 曉玲(2015): 乳幼児のネガティブな感情表出における母親の対処方法. 日本発達心理学会第26回大会, 東京大学本郷キャンパス.
- 関口奈保美・三浦正江・岡安孝弘(2011): 大学生におけるアサーションと対人ストレスの関連性: 自己表現の3タイプに着目して. *ストレス科学研究* **26**, 40-47.
- Shutay, J.C. (2001): Developing a profile for adolescent male and female parents as a function of demographic and individual characteristics: A comparison of mothers and fathers. *The Sciences & Engineering* **62**(1-B), 142.
- 外山美樹(2002): 大学生の親密な関係性におけるポジティブ・イリュージョン. *社会心理学研究* **18**(1), 51-60.
- 高田利武(1987): 社会的比較による自己評価における自己卑下の傾向. *実験社会心理学研究* **27**(1), 27-36.
- 高田利武(2000): 相互独立的 一相互協調的自己観尺度に就いて. *奈良大学総合研究所処報* **8**, 145-163.
- 高田利武(2002): 社会的比較による文化的自己観の内面化 一横断資料に基づく発達の検討一. *教育心理学研究* **50**, 465-475.
- 高橋恵子(2019): 子育ての智慧: 幼児のための心理学(岩波新書). 岩波書店, 東京, p95.
- 田中昭夫(1997): 幼児を保育する母親の育児不安に関する研究. *乳幼児教育学研究* **6**, 57-64.
- 田上綾子・柴山謙二(2011): 現代青年の親友関係における関係性高揚と主観的ウェルビーイング: 文化的自己観を踏まえた検討. *熊本大学教育学部紀要(人文科学)* **60**, 145-152.
- 周 玉慧・深田博己(2017): 夫婦関係に及ぼす葛藤対処方略の影響: 行為者 一パートナー相互依存モデルに基づく検討. *対人コミュニケーション研究* **5**, 1-20.
- Rholes, W.S. and Simpson, J.A. (編)(2004) / 遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・串崎 真(監訳)(2008): 第9章 成人の親密な関係における葛藤 一アタッチメントの視点から一. In: 成人のアタッチメント: 理論・研究・臨床. 北大路書房, 京都, pp238-267.

Relationship between Cognitive Characteristics and Distress in Mothers with Infants: Examination from Relative Evaluation of Personal Network

Xiaoling SHI

Tokyo University and Graduate School of Social Welfare (Ikebukuro Campus),
2-47-8, Minami-Ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo 171-0022, Japan

Abstract : This study examined the relationship between mothers' distress and self-construal as independent vs. interdependent, and also evaluated perceived social support and relative evaluation of personal network. Mothers of 2-6 year-old children ($N=272$) completed questionnaires. A regression analysis indicated that interdependent self-construal related positively to distress, while their independent self-construal, support from relatives, also passive evaluation of husbands (not worse than others) related negatively to distress. Based on correlational analysis, it was confirmed that relationship-enhancement was related in part to independent/interdependent self-construal. In particular, the relative evaluation that "husband is not worse than others" was related to reduced distress was a novel finding of the present study. Future studies should probe the process of mothers with young children evaluating their husbands in a Japanese family context.

(Reprint request should be sent to Xiaoling Shi)

Key words : Mothers' distress, Independent/Interdependent self-construal, Relative evaluation of relationships